コレンテ　vol. 44　n.393　　agosto 2023

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊イタリアの子どもに日本語を教える＊

深草　真由子

長かったような短かったような一年が無事におわり、ほっとしている。私が日本語を教えている語学学校も公立学校のカレンダーにならっており、6月の 2 週目が今年最後のレッスン日だった。今回はこの学校で担当した〈子どもクラス〉についてお話ししたいと思う。

クラスのメンバーは 13 歳の C ちゃんと 12 歳の E ちゃん、9 歳の A ちゃんの女の子 3 人組。もうかれこれ 2 年続いているから、はじめて来たとき一番小さなAちゃんはまだ7歳だったわけだ。〈子どもクラス〉とはいうが、子どもを対象に限定したクラスではない。人口 1 万人ほどの小さなこの町で「ゼロから日本語を勉強してみたい人」と声をかけて集まってきたのが彼女たちだったのだ。

高校生や大人が来るのを予想していたから驚いたし、こんな年齢の子たちに教えるのは初めてだったので戸惑いもした。大学生相手のときと同じやり方は通用しそうにない。子どもたちに楽しく学んでもらえるレッスンをしたいものだが、どうしたらいいか。アイデアをひねり出したら、そんな授業も一回や二回はできるかもしれないが、年間通して続けていけるだろうか。途中で誰かが退屈して、やめるかもしれない。正直なところぜんぜん自信がなかった。そもそも、これに従って進めれば大丈夫という手引きがほとんどないのだ。

私がいつも使っている教科書は文法、会話、読み書きを並行して教えられるように作られたものだが、学習者として想定されているのは大学生である。

子ども向けの教科書もあるにはある。しかしそのいずれもが、日本にいる外国人の子どもや、外国にいる日本人の子どもを対象にしているものだ。日常で日本語に触れる機会が圧倒的に少ない私の生徒たちには、あまり向いていないように思われた。

子どもに対してどんなアプローチが有効であるかを知るのに、これらの教材が大いに役だったことは言うまでもない。それでも、よりどころにする特定の教科書というものをもたないまま、授業をゼロから組み立てていくのは本当にたいへんで、試行錯誤の連続だった。

まずは仮名。これは学習者が最初に出くわすハードルである。記憶を助けるアプリなど便利なものもたくさんあるが、結局は自分で何度も練習して覚えてしまうしかない。ただ、その反復がおもしろいはずはなく、教える側としてもいつも困ってしまう。

〈子どもクラス〉では覚えてしまうことはできなくても、表を見ながらゆっくりでも正確に読んだり書いたりできるようになれば OK とした。「あいうえお」のトランプやパズルを使って、遊びながら学んでもらった。そういえば、家の壁に貼っていつでも

見ることができるように、仮名表を大きくプリントアウトしたものをあげたこともあった。

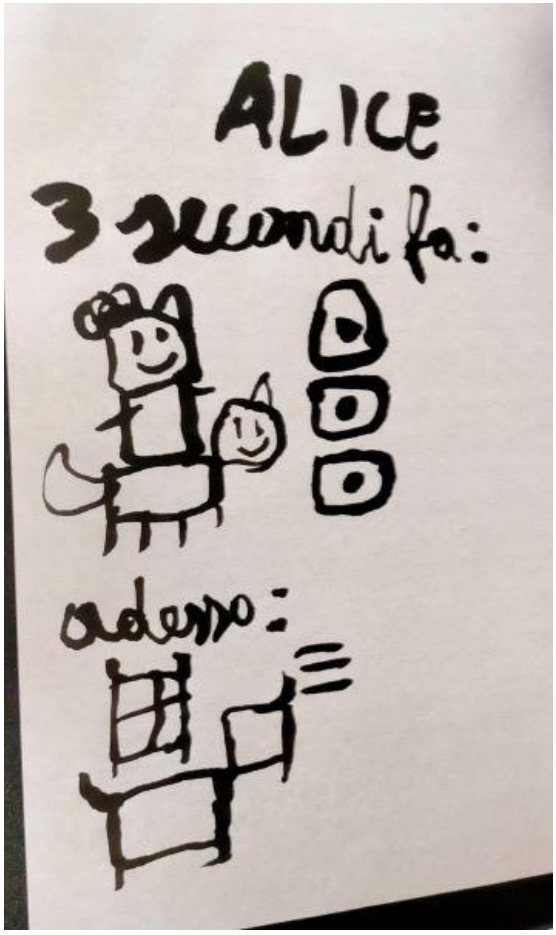
せっかく一字一字解読しても、その語に親しみがもてなければおもしろくないだろうと、練習で読ませる単語にもひと工夫した。平仮名の場合は、子どもたちが知っている言葉や興味をもちそうなもの（すし、まねきねこ等）。ここで「だるま」が大当たりする（くわしくは後述）。片仮名の場合も本人たちの名前はもちろん、キャラクターの名前や英語を介する必要のないもの（キウイ、コアラ等）を選んだ。

漢字は仮名よりうまく教えることができたし、生徒たちの習得も早かった。というのも、私は立命館大学の白川静記念東洋文字文化研究所がやっているオンライン講座をうけており、そこで得た知見をレッスンにうまく生かすことができたのだと思う。

たいていの教科書では基本の漢字、つまり日本の小学校低学年で習う漢字から、その形、意味、音読みと訓読み、送り仮名、そして熟語などを見ていく。ところがこの方法で数十の字を学んでも、漢字の成り立ちを体系的に理解するまでには至らないだろうし、このようにして習う初歩レベルの字がイタリアの子どもたちの関心とマッチしているとも限らない。

そこで私は思いきって動物の漢字から始めることにした。たとえば「馬」であれば、まずウマの絵を自由に描かせ、それから「三千年前の中国人が書いたのはこんなのでした」と言って甲骨文字か金文を見せ、それを自分の絵のとなりに写させる。さいごに「日本ではこう書きます」と言いながら漢字を書いてみせる。読み方は字義を日本語であらわすもの一つにしぼり、書き順などの細かいことにはこだわらない。こんなふうに、生き物については象形からなるものだけでなく、それが出す音（鳴き声など）を声符にもつもの（猫、鳩、蚊など。いっしょにオノマトペも学んだ）も見て、日または月の形を含むもの（朝、夜など）、人の形を含むもの（北、保など）、足跡の形を含むもの（止、歩、降など）を勉強した。これらと漢数字などをあわせて、全部で 70 か 80 の字を学んだ。

感心したのは、自分たちが熱中しているゲームをあらわす漢字を、E ちゃんが考案してしまったことだ。ロゴを指でクリックする人の絵からできた人偏の漢字である。同じようにして E ちゃんは他の2人をあらわす漢字もつくった。たとえば A ちゃんの場合は、A ちゃんのシンボルマークであるユニコーンに、彼女の好きな猫のキャラクターとゲームのロゴをあわせたもの。C ちゃんの場合は、左に C ちゃん、右に髪を逆立てて怒っているお母さんの組みあわせで、これも人偏の字だ。



【E ちゃんが考案した、A ちゃんをあらわす漢字】

文法はどこかで行きづまってしまうのではないかと心配だった。

大学生が相手であれば、はじめに「名詞＋です」の文型と、それをもとにしたさまざまな表現を見たあと、動詞文を勉強する。まず辞書形（たとえば「食べる」）から丁寧形の非過去（食べます・食べません）をつくる方法を学び、その動作にかかわる情報（いつ・どこで・なにを）をくっつけて文を

長くしていく。つづいて過去でも同じことを繰り返して、知識を定着させていく。普通形（食べる・食べない）をやるのはずっと後である。

〈子どもクラス〉では動詞の丁寧形をすっ飛ばして、先に普通形の非過去を教えた。その肯定の形が辞書形とおなじだから、覚えることが一つ少なくてすむというのもあるが、なにより子どもたちにとってもっとも身近な日本語（J-POP の歌詞やアニメ）では、普通体でのくだけた言葉づかいを耳にする機会のほうが多いだろうと思ったからである。

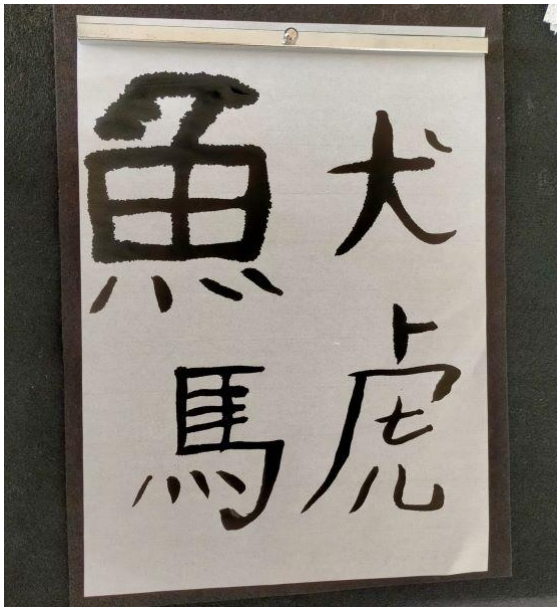
子どもたちはスッと日本語の世界に入っていった。文法の細かな説明などは必要としていないようにみえた。とくにＡちゃんには驚かされた。彼女はこれまで私がうけもった生徒の中でも最年少であるが、大きな数字をこんなにもやすやすと理解してくれた人は他にいなかった。たとえば 10 万は、日本語では 10×10,000 であるが、イタリア語では 100×1,000 と考える。大人になればなるほど母語での表現に慣れてしまって、別の言語でのとらえ方になかなか頭を切り替えられなくなるものだ。

Ａ ちゃんはまた、私が「元気？」とたずねると、いつも両手を大きく広げて「スーペルゲンキ」と答えてくれた。イタリア語でも嬉しくて仕方がないときに supercontento/a と言うことがあるから、それをまねしているのだろう。彼女にとってはイタリア語と日本語のあいだに壁など存在しないようだ。

毎回毎回、クラスのレベルや学習項目にあった活動を考えたり、使える素材を探し出したりするのは、思っていたとおり、楽なことではなかった（カードなどの道具も手作りしないといけないし）。歌も選ぶのにいつも悩んだものだ。けれどもちょうどよいものが見つかれば、その日のレッスンは成功したも同然だった。子どもたちは *We wish you a Merry Christmas* の日本語版や、動物の名前がいくつか出てくるトトロの『さんぽ』などがとくに気に入ったみたいだ。といっても実際に歌うのは私と Ｃ ちゃんだけ。音痴だから恥ずかしいと言うＥちゃんは MC と録画担当で、Ａちゃんは音楽を聞くと踊らずにはいられないようだ。

早口ことば、お店屋さんごっこ、福笑い、トンボラ…いろんなゲームをとりいれた。なかでも子どもたちが一番ハマったのは「だ～るまさんがこ～ろんだ」だ。仮名を勉強しているときに「だるま」を紹介したのだが、そのときに「そういえば、こういう遊びがあって」と言うと、子どもたちが「やってみたい！」と飛びついたのだ（イタリアにもこれと似たもので uno, due, tre…stella!というのがある）。使える表現をいくつか教えて、あとは子どもたちに自由に遊ばせた。いつも大いに盛りあがって、さわがしいと隣のクラスから苦情がくるくらい。

言語の知識にとどまらず、文化も伝えることができればと手探りでやってきた。子どもたちの反応や関心ごとに目を向けるよう心がけていると、こちらもだんだん肩の力が抜けてきて、それなりに良い授業ができるようになったと思う。もちろん反省点もあるし、私が知らないだけで、もっと効果的なメソッドもあるのかもしれない。でも、子どもたちは金曜日のレッスンをいつも心待ちにして、2 年間も通いつづけてくれたのだ。私にとってはこれがいちばんの喜びである。



【漢字もこんなに上手になりました
（ときどき間違うこともあるけれど）】

（元当館スタッフ）

イタリアあれこれ⑥

＊ボローニャの思い出＊

杉　栄子

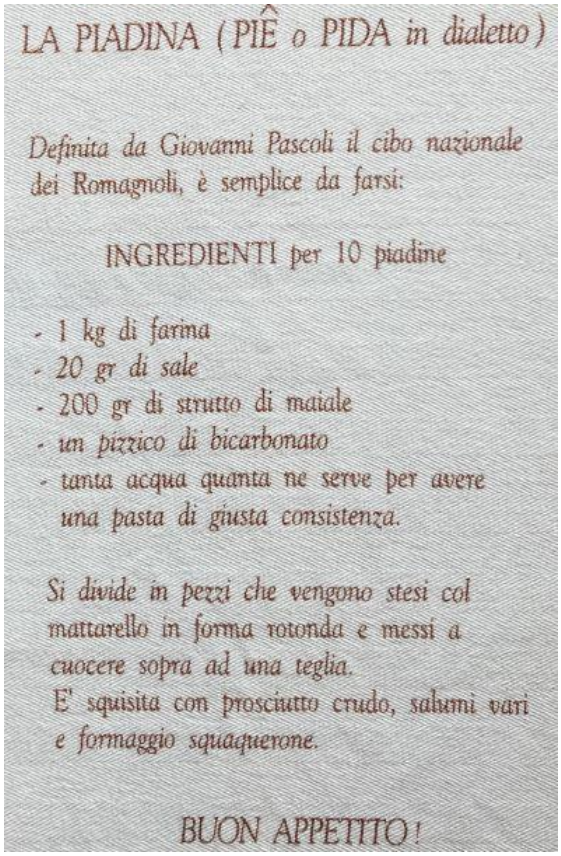
1995 年 9 月から約 1 年間、私はボローニャ大学に留学した。今回はその時の思い出を書こうと思う。

ボローニャはイタリア北部にある町で、現在の人口は約 39 万人の中都市である。交通の要所であり、例えば北東にあるヴェネツィアや北西のミラノから、鉄道でフィレンツェやローマへ向かおうとすると、必ずボローニャを通ることになる。アクセスは非常に良く、郊外には大きな見本市会場があり、さまざまな国際展示会が開催されているし、2017 年には FICO EATALY WORLD という巨大な食のテーマパークがオープンした（いつか行ってみたい）。

中心部である旧市街には、中世やルネサンス時代の建物が残っているし、古代ローマ時代のエミリア街道が町を東西に横切って走っているが、ボローニャの街並みの最大の特徴はポルティコだ。建物 1 階の前面部分がアーケード状に屋根のある歩道になっていて、その屋根は頑丈な柱で支えられている。元々は、中世の時代に住居スペースを確保するために 2 階部分を道路の側に拡張し、それを下から支えるために 1 階部分に柱を作ったのが始まりらしい（当初は違法建築だったらしい）。その後、様々な形態、様式でポルティコが作られた。現在、旧市街だけで全長約 40 キロのポルティコが残っており、2021 年には「ボローニャのポルティコ群」としてユネスコ世界遺産に登録された。

ポルティコは非常に便利で快適である。雨が降っても傘をさす必要なく濡れずに歩いて移動出来るし、日差しが強い時には常に日陰を歩いていられるからだ。バールなどの飲食店も、天候を心配することなく、店の前にテーブルや椅子を置くことが出来る。ポルティコの柱はほとんどが石で出来ていたが、レンガ製のものや、鉄筋コンクリートのものもある。梁が木製というのもある。ギリシャ神殿の柱のように、装飾が施されどっしりとした柱があるかと思えば、何の飾りもないシンプルなものや、細めでスラリとしたものもある。色合いも白っぽいものから、オレンジや黄色など、建物と調和した形状になっている。

街の中心部で用事がある時、勉強で行き詰まった時、なんとなく気分転換したい時など、ポルティコの下をよく歩いた。特に、近所で雰囲気の良い Strada Maggiore と Via Santo Stefano がお気に入りで、週に 2、3 度はそこを散歩していたような気がする。そのどちらかの通りにピアディーナ屋があった。ピアディーナとは、ボローニャから東側、アドリア海までの地域（ロマーニャ地方）のソウルフードである。生地を発酵させずに焼いて作った薄い円盤状のパンに、ハムやチーズなどを挟んで食べる。この地域出身の詩人ジョヴァンニ・パスコリは「ロマーニャ人たちの国民的食べ物」と呼んでいる。私はボローニャで初めて食べて大好きになった。


LA PIADINA (PIÊ o PIDA in dialetto)

Definita da Giovanni Pascoli il cibo nazionale dei Romagnoli, è semplice da farsi:

INGREDIENTI per 10 piadine

- 1 kg di farina
- 20 gr di sale
- 200 gr di strutto di maiale
- un pizzico di bicarbonato
- tanta acqua quanta ne serve per avere una pasta di giusta consistenza.

Si divide in pezzi che vengono stesi col mattarello in forma rotonda e messi a cuocere sopra ad una teglia.
E' squisita con prosciutto crudo, salumi vari e formaggio squaquerone.

BUON APPETITO!

【ピアディーナのレシピ】

もうひとつ、私がボローニャではまった食べ物はボンボローネだ。いわゆる揚げドーナツで、中にチョコレートやマスカルポーネで作ったクリームが入っていて、かなり甘い。脂肪と糖分の塊のようなお菓子だが美味しかった。映画を見た後など、友達と一緒にそれを食べながら、ポルティコの下を歩いて帰ったことが懐かしい。留学から帰国後は、ピアディーナもボンボローネも長らく食べる機会がないままなのだが、なんと昨年あたりからボンボローネを売っているお店をちらほら見かけるようになった。大阪には専門店がオープンして行列まで出来ているので、マリトッツォに続くブームになるのかもしれない。

ボローニャには LA DOTTA、LA GRASSA、LA ROSSA という 3 つの有名な呼び名がある。ひとつめの LA DOTTA とは「学問の町」という意味で、言うまでもなくボローニャ大学があることに由来する呼び名である。19 世紀の調査委員会によって創立は 1088 年と認定され、現存する世界最古の大学ということになっている。ただし今の大学とはだいぶ雰囲気が異なっていた。学びたい学生たちが教授を雇って講義をしてもらうというシステムで、教授たちは自宅や、教会などの公共施設を借りて講義を行なっていたらしい。ようやく 1562 年に、マッジョーレ広場の近くにアルキジンナジオの館が建設され、街中に散らばっていた大学機能がまとめられた。

現在、館は市の図書館になっているが、解剖学教室が有名だということで見学に行った。「教室」と書いたがイタリア語では「TEATRO ANATOMICO（解剖劇場）」と言う。木製で重厚な雰囲気の教室の中央に解剖用の作業台があり、それを取り囲むように学生用の席が階段状に設置されている。その形状が円形劇場に似ていることから TEATRO と呼ばれている。席のひとつに腰を掛け、どんな風に授業が行われていたのだろうか、ここに座った学生はどんな景色を見ていたのだろうかと想像に耽った。解剖学教室は確かに印象的だったのだが、アルキジンナジオの館には、私をさらに圧倒したものがあった。それは教室や廊下の壁と天井を埋め尽くす、夥しい数の紋章である。館が完成してから 1803 年に現在の所在地である Via Zamboni へ大学の拠点が移されるまでの約 240 年の間に教鞭をとった教授たちや、在籍した学生たちの紋章で、ボローニャ大学の歴史の長さと厚みを感じさせた。

【アルキジンナジオの紋章】

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bologna,_Archiginnasio,_stemmi.jpg

現在、ボローニャ大学には約 9 万人の学生が在籍している。全員がボローニャに住んでいるわけではないと思うが、約 39 万の人口に対して驚きの割合である。大学には学生寮があるが数は少ないので、遠方からの学生のほとんどは部屋を借りて暮らすことになる。幸いなことに、私は大学に程近い女子寮に入ることが出来た。

寮は 2DK の集合住宅といった感じだった。1 戸ごとに二人用の部屋が 2 つに台所と浴室があり、それが全部で 20 戸あったから、80 人の学生が住めるようになっていた。私にあてがわれた部屋には、すでにイェレナという女の子が住んでいた。彼女はイタリア人ではなく、サラエボ出身のセルビア人で、名前は Jelena だけどイタリア人には発音が難しいみたいで Elena と呼ばれていると自己紹介してくれた。それから彼女はとても親切に、部屋の使い方や、掃除当番についてなど、共同生活のルールをイタリア語でゆっくり説明してくれた。

95 年といえば、ユーゴスラヴィア紛争の真っ只中だったはずだが、恥ずかしながら私はその地域のことを全くわかっていなかった。内戦中であることはニュースで見聞きし、破壊されたサラエボの映像が記憶にあったのだと思う。ご家族のことを尋ねたら、今はベオグラードに住んでいるとの

ことだった。それ以外にも何か説明してくれたと思うのだが、当時の私には分からなかった。

寮にはユーゴスラヴィア地域の出身者が 8 人いた。イェレナを含めて 3 人と知り合いになった。彼女たちはイタリア語が上手で、明るく優しかった。ある時、その 3 人と話していると、「私たちは以前は同国人だったけど、今は国籍が違うのよ」と、一人が言った。それはどんな気持ちになるのだろうかと想像しようとしたが、難しかった。何も言えずにいたら、今度は別の一人が「たいしたことじゃないよ。私たちは友達だから」と言って笑ったのでほっとした。

イェレナと私の部屋は大きめの道路に面していて、そこを車が通る音がいつも聞こえていた。ある日、車にしては大きく騒々しい音がしたので、窓の外を見に行くと戦車が列を作って走っていた。何のためにそこを通っていたのかはわからないが、動いている戦車を見るのが初めてだった私は、ついカメラを取り出して写真を撮った。ちょうどその時、イェレナが何かを取りに部屋に戻ってきて、カメラを手に外を見ている私に気がついた。何を撮っているのと外を見た彼女は、戦車を見て、がっかりしたような顔になった。「初めて見た」と私が言うと、彼女は「あなたの国では珍しいんだね。その方がいいよ。私は故郷でいつも見てきた」と悲しそうに答え、用事を済ませて部屋を出て行った。テレビでしか見たことがなかったものを目にして、私は何も考えずに写真を撮ってしまったけれど、軽はずみな振る舞いだったかもしれないと、今でも時折思い出しては反省している。イタリアの話からは少し逸れてしまったが、留学していた当時のこととなると、私はいつも彼女のことを思い出す。

ボローニャの呼び名ひとつ目で紙面のほとんどを使ってしまった。ちなみに二つ目の LA GRASSA は「肥満の町」という意味で、ボローニャが美食の町であることを示している。日本でも知られているラザニアやミートソースのパスタはボローニャの名物であるが、その他にもトルテッリーニという詰め物入りパスタ、モルタデッラソーセージ、モデナのバルサミコ酢、パルマの生ハム、パルミジャーノ・レッジャーノチーズなど、美味しいものがたくさんある地域である。

三つ目の LA ROSSA は「赤い町」という意味である。中世の赤い街並みと、左派が強いことから、こう呼ばれるようになった。ボローニャのシンボル「二つの塔」のひとつ、高さ 97m のアジネッリの塔に登ると、統一感のある赤くて美しい街並みを見渡すことが出来る。登ったことを寮で話すと、大学卒業前にこの塔に登ると留年するという、学生の街ならではの都市伝説を教えられた。ジンクスの類が全く気にならない私は帰国前にもう一度登った（留年はしていない）。もう一つの塔、ガリセンダは大きく傾いており、ダンテの「神曲」に登場することで有名である。地獄で巨人がダンテに向かって身を屈めてくる際の気持ちを、ガリセンダの塔を傾いている側から見上げる時の印象に喩えている。つまり塔は、「神曲」が書かれた 14 世紀初頭にはすでに傾いていて、取り壊されることなく傾いたまま存在し続けている。登ることは出来ないが、傾いている側に近づくことは可能で、ダンテが見たであろう景色、巨人に見下ろされる気分を味わうことが出来る。

【アジネッリの塔】

（当館語学講師）

編集・発行 / **（公財）日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075)761-4356/FAX: (075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/